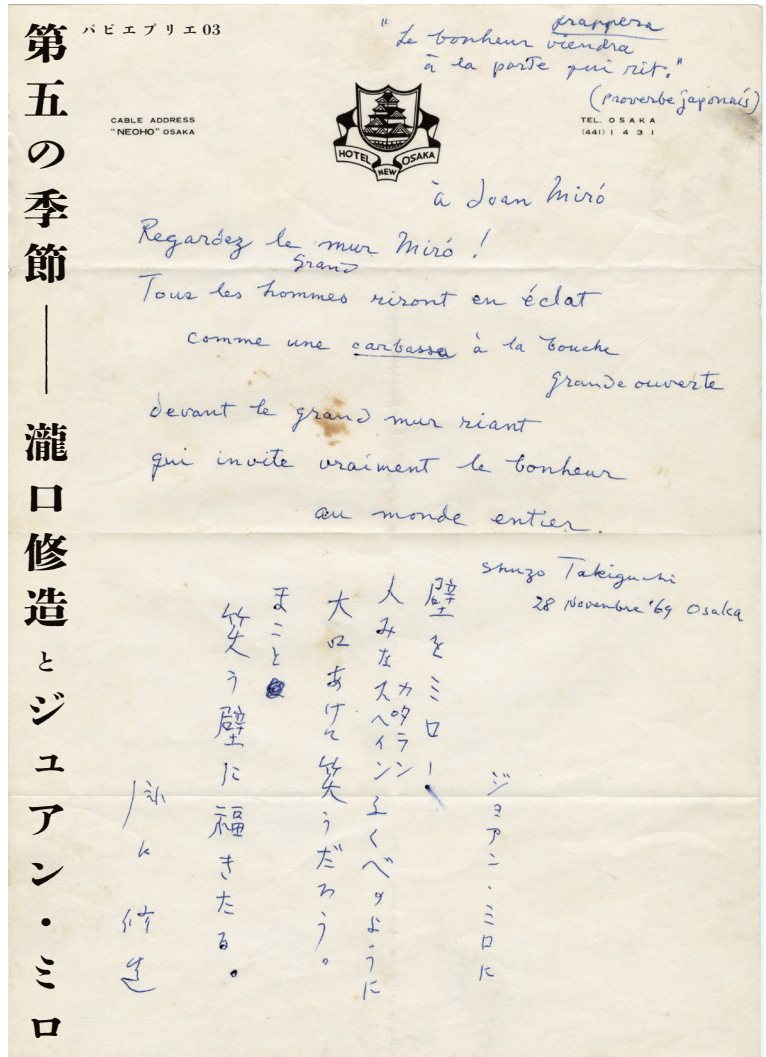


Regardez le grand mur Miró!

詩と絵とはつねに貧しいときのパンと水のようなものでなければならぬのである。
 —瀧口修造『ミロと詩画集』画家の沈黙の部分『みすず書房、一九六九年、一三八頁（コレクション瀧口修造2『みすず書房、一九九一年、一九二頁）』

この色紙の詩と『ミロの星とともに』に掲載された同節には若干の異同がある。
 —詩：瀧口修造、画：ジョアン・ミロ『ミロよ……』一九六六年「色紙に書かれた詩」『ミロの星とともに』の最終節およびミロのドローイング。

ミロよ
 あなたにならって
 蜻蛉の誕生日を祝おう
 この島々の国で
 あなたがもたらした才五の季節の
 ある晴れた日に



1940年、瀧口修造は世界でもっとも早いジョアン・ミロのモノグラフ『ミロ（西洋美術文庫48）』（アトリエ社）を上梓した。1958年、瀧口はヴェネツィア・ビエンナーレの日本代表兼審査員として渡欧し、欧州旅行を行ったが、その際ミロと会うことを望みながらも叶わなかった。ミロへの継続する関心を持ちながら実際2人が出会ったのは1966年の個展にあわせたミロ初来日の際だった。この展覧会を記念して瀧口が書き、朗読された詩が『ミロの星とともに』である。1966年10月4日の日付を持つ、瀧口が詩を書きその周囲を巡るようにミロがドローイングを描いた色紙は、最初の共作詩画と呼べるだろう。ここに書かれた詩は『ミロの星とともに』の最終節である。そこに記された「第五の季節」という瀧口の言葉は、四季がめぐる1年の内に胚胎した空白の季節、あるいは過ぎ去ることのない、もうひとつの季節を指しているのかもしれない。太陽と地球の関係によって生まれるのが四季だとしたら、「第五の季節」とは「ミロの星とともに」にあること、すなわちミロと瀧口の関係によって生まれた季節だと言える。

2人が交わした書簡と2冊の共作詩画集『手づくり謠 ジョアン・ミロに』（1970年）、『ミロの星とともに』（1978年）はその季節の痕跡として私たちに残されている。本シンポジウムでは、往復書簡を読み解き、2冊の共作詩画集へ至るプロセスおよびそこで展開された諸問題について考えたい。

2025年12月6日 | 慶應義塾大学三田キャンパス東館6階G-Lab

主催：慶應義塾大学アート・センター 協力：富山県美術館
 参加無料

登壇者：朝木由香、朝吹亮二、笠井裕之、松田健児（JSPS科研費 19K00147）

瀧口修造研究会メンバー（カニエ・ナハ、久保仁志、桑田光平、山腰亮介、山本浩貴 [いぬのせなか座]）

関連企画

瀧口修造とジョアン・ミロ：書簡と詩画集

2025年10月9日-2026年1月12日 | 富山県美術館3階展示室6

主催：富山県美術館、慶應義塾大学アート・センター

【1部】
 13時-14時20分

瀧口修造とジョアン・ミロの往復書簡について
 一 朝木由香、朝吹亮二、笠井裕之、
 裕之（司会）、松田健児

【休憩】
 14時20分-14時40分

【2部】
 14時40分-15時

富山県美術館の展示室（瀧口修造と
 ジョアン・ミロ：書簡と詩画集）を同時
 中継

15時-16時

往復書簡と2冊の詩画集について
 一 朝木由香、朝吹亮二、カニエ・ナハ、笠井裕之、
 久保仁志（司会）、桑田光平、田中裕希、
 松田健児、山腰亮介、山本浩貴 [いぬのせ
 なか座]